



絆～ほんとうに
大切なもの ①



<パブー版>

比良岡美紀
(2005、2007、2012)

目次

はじめに	1
(1)	1
(2)	2
(3)	4
(4)	6
(5)	7
奥付	
奥付	12

はじめに

このたび、新たに作品を公開することとしました。以前、クリエイターズワールドというサイトに掲載していた作品です。タイトルは、『絆～ほんとうに大切なもの』。2005年に母校の同窓会があり、それをきっかけに書きました。同窓会をモチーフとした作品です。でも、同窓会に主眼を置いているわけではありません。あくまでも、同窓会はきっかけです。

クリエイターズワールドで連載したのは2007年。途中、サイトの運営主体が変わりましたが、最後まで連載を続けることができました。

今回パブーで公開するにあたり、なるべく2007年当時の内容を変えないようにしたいと思っています。より分かりやすくするための変更は加えますが、内容の改変は極力しないように...と。

どうぞよろしくお願いいたします。

②はこちらから

<https://puboo.jp/book/43688>

(1)

原田俊彦は平凡なサラリーマン。妻と息子と3人暮らしだ。豪邸とはいえないが、5年前に家を建てた。費用は双方の両親から少しずつ出してもらい、自分たちの貯金と合わせて足りない分のローンを組んだ。おかげで月々の負担も少なく、完済までの期間も短い。いい買い物だったんじゃないか、と今でも俊彦は時々思う。妻のミチルは専業主婦。短大卒業後、俊彦と同じ会社に勤めていた。職場結婚というやつだ。息子の剛一は今年12

歳、小学6年生になる。

ミチルは小学受験を主張したが、俊彦は反対した。それで公立小学校へ行かせたものの、剛一の通う小学校は学級崩壊がすすみ、満足な授業が受けられない。そのため三年生から塾へ行かせることにしたが、そうすると当然、中学受験が視野に入ってくる。剛一が6年生になってから、ミチルは毎日のように、同じ塾の子供がどこを受けるつもりだの、この中学は少人数教育でとても充実しているだの、俊彦にとってどうでもいいことばかりまくし立てるようになった。

その都度俊彦は、「後してくれよ」と言うのだが、それがミチルには不満なようだった。剛一のことを思うなら私の話を聞くべきだわ、聞かないのは剛一への愛情が薄いからよ、とミチルは言った。俊彦が呆れた顔をしようものなら、あなたは剛一がどうなってもいいのね、と言って俊彦を困らせるのだった。

いったい俺はあいつのどこが気に入って結婚したんだろうか——俊彦はこの頃そう思うようになっていた。それだけミチルの受験熱にうんざりしていたのかもしれない。

大学から、卒業15年目の集まりを催すという案内が来たのはそんな時だった。在学中は同窓会など意識したこともなかったが、もう15年も経つのかと、俊彦は過ぎ去った月日を思った。

そういえば、あの頃思いを寄せていた女の子は今どうしているだろう。その子はとても物静かで、清楚な印象だった。それだけでもミチルとは正反対だが、他人の噂話などするような人ではなかった。名前は確か.....そう、川端依子だ。卒業を前に思い切って告白したら、少し当惑したように、田舎に帰って親の決めた相手と結婚するんだと言った。

あとから聞いた話では、その相手は15歳も年上ということだった。そんなオヤジのどこがいいんだ、とそのときは思ったが、気づけば自分もそのオヤジと同じ年だ。今の自分が15歳年下の女の子と結婚する。そう考えると、俊彦はまんざらでもない気がするのだった。

(2)

川端依子は故郷に戻って親の決めた相手と結婚、今年で15年になる。15歳も年が離れているせいか、会話はあまりない。結婚当初はそんなものかと思っていたが、幼なじみの松平理恵が結婚し、その生活ぶりを聞くにつれ、そうではないと分かった。理恵の夫は、理恵に言わせればとても口うるさく、家事一切に口を出す。共働きだったが家事はもっぱら理恵の仕事だ。

何もしないくせに文句ばかり言うんだもの、そんなに言うなら自分でやればって、言ってやったわ！と言いながら、でも本当に彼が家事全般こなすようになったら、それはそれで嫌なのよね、女心はフクザツだわ、と言って依子を笑わせた。

笑いながらも依子は、理恵夫婦を羨ましいと思っていた。自分はとても、夫に鬱憤をぶつけるなんてできないし、ましてや喧嘩なんてありえない。心のどこかでそういう関係になりたいと思っていたが、夫にそれを求めるのは酷な気もした。誰か別の相手となら、そういう関係になれるのかもしれない……。理恵と会うたび、依子はそう思うようになっていた。

夫と結婚したのは、東京の大学に出してもらったからであり、それも理恵が同じ大学の同じ学科へ行くと言ったからだった。両親は地元の短大へやり、卒業後は花嫁修業をさせるつもりだったが、理恵も依子もこの大学でなければいやだと言いつつ、仕方なく東京へ出したのだった。

その代わり、卒業したら親の決めた人と結婚するのだと、依子は在学中から思っていた。だが大学時代の友人が次々と結婚していくにつれ、自分の結婚生活は果たしてこれでよいのだろうかと思うようになっていた。

理恵だけではない、佳恵だって、久美子だって、みんな幸せに暮らしているわ、なのにどうして私は幸せと感ぜられないのかしら。依子は心の中に湧いてきた疑問に、答えを見出せずにいた。

そんなとき、大学から卒業十五年目の集まりを開くという案内が来た。

もう十五年、早いものね——そのとき、卒業前に告白を受けたことを思い出した。

彼の名前は、ええと確か……原田、そう、原田俊彦君だったわ。

あまりお話をしたことはなかったけれど、彼は今どうしているかしら。

結婚して、幸せな家庭を築いているかしら。もしまだ独身だったら——

そう考えたとたん、自分にブレーキをかけた。

関係ないじゃない、私はもう結婚してるんだもの。でも、もし独身だったら――。

ダメ！ それ以上考えてはダメよ。

依子は必死で自分に言い聞かせたが、突如として自分の中に芽生えたその感情を、

どう扱ってよいか分からなかった。

その感情が依子の中で育つにつれ、俊彦の存在は次第に大きくなっていくのだった。

(3)

「原田さん、お疲れ様です。どうです、軽く飲みに行きませんか？」

オフィスを出る直前、俊彦は後輩の黒川隼人に声をかけられた。

「うん、あ、いや、やめておくよ。今日は早く帰らないと」

「そうなんですか。残念だな」と一応は了解した様子黒川は、俊彦に並んで歩き出すと、言葉を続けた。

「そういえばこの前、高校の同期のやつらと飲んだんですけど、バブル時代の話になって、僕だけ全然ついていけなかったんですよ。そんなにいい時代だったんですか？」

「バブル？ 君も知らない年じゃないだろう。あ、君は向こうの大学を出て就職したんだっただか。それで知らないんだな」

俊彦は外に出ると、初秋の冷たい空気にコートの襟を立てた。

「いい時代だったかと言われてもなあ、どうかな。就職には苦労しなかったが、少しは荒波にもまれたほうがよかったかと思うときもあるよ」

黒川は俊彦の隣を歩きながら話を聞いている。

「でも今じゃバブルの負の側面が強調されてるから、君の友達は飲み会のときくらいしか、当時を懐かしむようなことは言えないんじゃないか」

俊彦がそう言うと、黒川はうなずいて、

「なるほど、そうかもしれないですね」と言った。

「今度から嫌な顔しないで、話を聞いてやることにします」

そう言った黒川は、さわやかな笑顔をたたえていた。

俊彦は一瞬どきりとしたが、それを隠すように、

「ああ、それがいいだろう」と言った。駅に着くまでの間、二人は無言だった。

「じゃあ原田さん、僕はこっちなんで、ここで失礼します。どうも、おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

黒川と別れた俊彦は電車に乗りこむと、空席がないのを見てため息をついた。仕方なく吊革につかまり、何を考えともなく揺られていたが、ふと窓に映った自分の顔に愕然とした。

なんだ、このにやけた顔は――。

黒川と話したせいだと見当がついた。心なしか周囲の視線も冷たく感じられる。俊彦は窓を見ながらネクタイをなおし、白髪が目立つ髪をなでつけた。

あのころは、楽しい毎日がいつまでも続くと思っていた。いつからだろう、寝ても疲れが取れなくなったのは。それだけじゃない、仕事でも無理がきかなくなっている。学生時代には想像もしなかった体力の衰えだ。みんなそうなのだろうか。

川端さんも、あの頃と変わっているだろうか――。

(4)

「もしもし、依子？ 久しぶりね。元気？」

「理恵！ うん、元気よ。本当、久しぶりね！ 3年ぶり？」

「もうそんなになるかしら。実はダンナが東京に戻る事が決まったんだけど、まだ引継ぎで忙しいから、私だけ先に戻ってきたの。ねえ、遊びにこない？」

「行きたい！ でも今日はダメなの。来週なら行けると思うけど」

「じゃあ来週の火曜日でどう？ お菓子作って待ってるわよ」

「嬉しい！ 理恵のお菓子、本当に美味しいものね。じゃあ近くなったらまた電話するわね」

理恵は夫が九州に転勤になったので、この3年、一緒に九州で生活していた。九州行きを決めてから、仕事もすっぱり辞めた。かなり慰留されたらしいが、本人はいたって淡泊で、どうせいつか辞めるつもりだったから、と言うのだった。何事も自分で決めている理恵が、依子にはまぶしく思えた。結婚するまでは親に従い、結婚してからは夫に従うものと思って生きてきたからだ。だが夫は、君の好きなようにしていいよ、というのが口癖だった。初めて言われたとき、意味が分からなかった。今でもよく分かっていない。

自分の好きにするというのはどういうことなのか、そもそも自分は何が好きなのか、依子は一度も考えたことがなかった。同窓会の話をしたときも、夫は、

「行きたいなら、行ってきたらいいよ。久しぶりに羽を伸ばしておいで」と言った。

それが依子には、夫が自分に無関心な証左と思えるのだった。

「ねえ理恵、どう思う？」

「どうって、何を？」

「だから、同窓会のこと、主人に言ったときの反応よ」

「いいだんな様じゃない！うちのダンナだったら百くらい小言が返ってくるわよ！でも日程を見たら彼がまだ帰ってないときなの！だから思いっきり羽伸ばすわよ～。ね、依子も行くでしょ？」

「え、ええ……」

「何よ、まだ迷ってるの？いいじゃない、行っておいでって言われたんだし」

「そうなんだけど、でもね」

「でも、なに？」

「ちょっと、気になることがあるの」

「気になること？」

依子はうなずいた。

「覚えてる？原田俊彦君」

「原田君？彼がどうかしたの？」

「実はね、この前思い出したの、原田君に告白されたときのこと」

「あー、そんなこともあったわね。あれよ、若気の至りってやつよ」

(5)

もう理恵ったら、と依子は思い、ついに核心に触れた。

「ねえ、原田君に会ったら、どうなると思う？」

「会ったら、どうなる？」

理恵はオウム返しに言った。依子が何を言っているか、すぐには分からないようだった。

しばらくして、「まさか……」とつぶやいた。

「ちょっと、あんたまさか、何か期待してるんじゃないでしょうね！」

違う、と依子は言おうとしたが、言葉は出て来ず、ただ口をぱくぱくさせた。

「そんなの昔のことじゃない！ 今とは全然違うわ。いったい何を言い出すの」

理恵のあまりの剣幕に何も言えず、依子はただ子どものように口をとがらせた。

理恵はため息をついた。

「何度も言うようだけど、あんたはご主人のありがたみが分かってない」

またはじまった……。理恵のお説教はもううんざり！

依子は思い切って言った。

「だって、理恵のだんな様みたいに関心を示してくれないんだもの」

「関心って……。うちのはただうるさいだけよ！」

一瞬、二人のあいだに沈黙が訪れた。理恵はふう、と大きくため息をついて言った。

「大切なものは、目に見えない、か」

「何、それ？」

「うちのダンナが好きな小説の一節。星の王子さま、だったかな。いい年してメルヘンオヤジなの！」

メルヘンオヤジという言葉がおかしくて、依子はぷっと吹き出した。つられて理恵も笑ったが、すぐに真顔に戻り、依子を見つめて言った。

「あたしは本当にあなたを心配しているの。大切なのは今をどう生きるかなのよ」

今を、どう生きるか……。理恵が真剣に自分を心配していることは、依子にも分かった。

でも……。今をどう生きたとしても、夫との溝を埋められるとは思えない。それが依子の結論だった。

「とにかく」と理恵は言った。

「同窓会には行きましょう、ね。久美子と佳恵も来るって言ってたから」

「うん……」

「大丈夫。おしゃべりしたら気が紛れるわ」

依子はうなずいたが、内心、俊彦が来なければ行く意味はないと感じていた。

奥付

奥付

絆～ほんとうに大切なもの パブー版①

<https://puboo.jp/book/43673>

著者：miki-hiraoka

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/miki-hiraoka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/43673>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43673>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<https://puboo.jp/>）

運営会社：株式会社 paperboy&co.

絆〜ほんとうに大切なもの パプー版①

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
